

# 曾我と虎御前

——人物移動と場の特性を手がかりに——

新村衣里子

## はじめに

建久四（一一九三）年五月二十八日に曾我十郎と五郎が富士の裾野で父の敵の工藤祐経を討つた事件をもとに作られたのが『曾我物語』である。従来の研究により、その表記の上から真名本と仮名本の二系統に大別される。本稿では、古態を示し、在地性を有するとされる真名本を中心に考察する。

敵討後に十郎は討たれて五郎は処刑される。若くして非業の死を遂げた曾我兄弟は畏れられて、その霊を慰撫される存在となる。彼らの鎮魂供養のために、大磯の遊女であった十郎の恋人の虎御前は箱根山で出家して寺社巡礼を行い、彼らの遺骨を善光寺に納める役割を果たす。そして、曾我の里を拠点として勤行の日々を送る。曾我の大御堂には、三浦や鎌倉をはじめとした相模の名だたる武士達が多数参集したと叙述される。

真名本ではこのように虎御前が曾我に籠ったとあるのに対して、仮名本<sup>2)</sup>においては、「虎、さすがに古里やこいしかりけん、又、十郎のありしほとりやなつかしく思ひけん、大磯にかへり、高麗寺の

山の奥<sup>(い)</sup>に入、柴の庵にとちこもり」と記される。なぜ真名本と仮名本とで差異が生じたのか。

福田晃氏は「現存真名本巻十において、虎御前回國譚が、大磯で終らず曾我大御堂で虎を往生させることによって結ばれているところに疑念をもつ」とし、「大磯高麗寺の修験比丘尼の面影をもつ虎としては、曾我の里での死はいささか構造上の矛盾を感じさせ、それに関する限りは、むしろ仮名本に『高麗寺の山の奥』の『柴の庵』で往生したとあるところに古伝承が留まっていると思われる。にもかかわらず真名本において、大磯を離れてあえて虎を曾我で往生するように変更したエネルギーを想定するならば、それは曾我大御堂における不断念仏・融通念仏の唱導ということになるであろう」と指摘する<sup>3)</sup>。確かに虎御前は大磯に深く関与する者ではある。しかし真名本に備わる在地性を考慮すれば、虎御前が曾我を拠点としたという展開には必然性があったと考えられる。虎の曾我への籠居が構想された帰結であったことを、当時の時代背景や曾我の特性を確認しつつ検討する。

## 一 養育、再生する曾我の母

曾我は、十郎と五郎が育てられた場所として重要な空間である。

彼らが育まれたこの地の特性は、曾我兄弟の母の姿によつて表徴されるものと考えられる。伊豆の狩野介茂光の孫娘であつた彼女は、はじめに伊豆国の国司として下つてきていた源仲成との間に京の小次郎と二宮御前を儲けたが、夫と共に上洛することはなく、その後河津三郎に嫁ぐ。河津三郎との間に、一万（十郎）と箱王（五郎）

を儲け、夫の死後に御坊が生まれた。彼女は出家を決意するが制止されて、舅の伊東祐親によつて強引に曾我祐信のもとへ嫁がされる。

嫌々ながらの再嫁であつたにもかかわらず、その後の母の様子は、「其後互に二世の契不<sub>レ</sub>浅送<sub>二</sub>年月<sub>一</sub>程に、此女房成<sub>二</sub>年来<sub>一</sub>、曾我殿の子共<sub>モ</sub>太多被<sub>レ</sub>儲<sub>ク</sub>、互に深<sub>キ</sub>歎<sub>共</sub>を被<sub>二</sub>取り延<sub>一</sub>」と、祐信との子供を育むことで癒されていつたと描写される。仮名本でこの場面に相當するのは、「いつしかかかるふるまひは、かへすくもくちおしけれども、心ならざる事なれば、うらみながらも月日をぞおくりける」という部分であり、真名本のように養育することで慰められるといった要素は見られない。

十郎と五郎が敵討後に亡くなつたとの報告を受けた母が半死半生の状態となる場面においても、これと同様のことが指摘できる。母親の受けた衝撃は凄まじいものであつたと想像されるが、祐信との間に生まれた幼い子供達の存在が、またしても彼女の再生に役を買っていることに気付く。「曾我殿の少<sub>キ</sub>人々<sub>ニ</sub>には、今若・鶴若・有

若<sub>モ</sub>そ<sub>レ</sub>在<sub>三</sub>三人<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>付<sub>ツ</sub>、母の袂<sub>ニ</sub>、鵜<sub>ニ</sub>ヤカ<sub>ハ</sub>なる聲共<sub>ニ</sub>て、何<sub>ニ</sub>母御前<sub>一</sub>、我等<sub>ヲ</sub>預<sub>レ</sub>ト誰<sub>ニ</sub>泣合<sub>レ</sub>は、亦<sub>ク</sub>起<sub>ル</sub>擧<sub>ツ</sub>、取<sub>二</sub>少<sub>キ</sub>者共の手<sub>ニ</sub>焦<sub>下</sub>モ哀<sub>なり</sub>」と、起き上がつて子供達の手を取る母親の姿が印象的な場面となつている。さらに、箱根で曾我兄弟の法要を行つてから曾我の里へ帰つてきた母の様子は、「奉<sub>レ</sub>テ見<sub>レ</sub>少<sub>キ</sub>子共<sub>ニ</sub>、心<sub>ニ</sub>少<sub>シ</sub>取<sub>レ</sub>延<sub>下</sub>タ」と、幼い子供達に接して少し気を紛らすことができたことと叙述される。このように、子育てによつて自己を再び甦らせる力を得ていく母の像は、真名本において繰り返し強調される。

自分の生存中に四人の息子達（十郎、五郎、御坊、京の小次郎）を次々と失つてしまつた母は、その悲しみを虎御前に向かつて述懐する。母は、御坊と京の小次郎は幼い頃から身に添えて養つてきたわけではないのでそれほどではないが、十郎と五郎に関しては、「自<sub>二</sub>血<sub>一</sub>の内副<sub>レ</sub>身に、有<sub>二</sub>乳<sub>一</sub>母<sub>ニ</sub>、夜<sub>モ</sub>晝<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>放<sub>レ</sub>身<sub>ヲ</sub>成<sub>レ</sub>長<sub>ク</sub>たり」ということで一層の悲しみが募るのだと語る。曾我兄弟の母にとつては、単に生んだという事実のみならず、生まれた時から身に添えて育んできたという過程こそが重要であつたと知られる。

様々な出来事に翻弄されながらも彼女が生き延びてこられたのは、幼い子供を養育するという役割が与えられていたからであらう。またそうした役割は周囲から要請されるものでもあつた。それは、彼女が夫の河津三郎の死後に出家しようとした時に伊東祐親によつて「少<sub>キ</sub>者共」（ここでは十郎と五郎のこと）をどうするつもりなのかと止められたり、十郎と五郎の首が曾我の里に届けられた時に髪を切ろうとしたところを曾我祐信によつて「少<sub>キ</sub>者共」（祐信との子供

達を誰に託そうとお思いなのかと説得されたりしていることなどから知られる。彼らの発言は、彼女に母性の自覚を促し、子供達の養育に対する責務があることを再認識させよう<sup>6</sup>と意図するものである。

真名本における曾我祐信については、坂井孝一氏によって「『曾我の母』と同質化される存在であるとともに、河津祐通との対比によって絶えずその印象を弱められてしまう存在」であって、そうした祐信像は「現実の社会で祐信が果たしていた役割や行為が『曾我の母』という人物像の中に吸収・解消され、『曾我の母』が祐信の代弁者であるかのように造型されることにもつながってこよう」と指摘されている。<sup>5</sup> 曾我の母についての記述がなされる<sup>7</sup>ところでは、その陰に祐信の存在もあることも同時に受け止めていく必要があるだろう。

祐経を討ち果たした後に名のりを挙げて誰も攻め寄せなかったという状況で、十郎がこの場を逃れて今一度母に会ってから自害しよう<sup>8</sup>と提案するものの五郎に拒否される場面がある。その際に五郎が挙げた理由のうちに、今さら戻るなどというのは母をはじめとした人々、とりわけ幼少竹馬の頃より育ててくれた継父の祐信に迷惑がかかるといったことが含まれていた。ここには、特に表立って出てくることはないが地道に彼らを支え続けていた祐信の包容力というものが垣間見える。

目立たぬ存在の祐信を支えとして、子供達を育むことで癒されていく母の姿は、養育や回復、再生の地としての曾我を印象づける効

果を発揮していると言えよう。

## 二 東海道の繁栄

頼朝が鎌倉を本拠として新たな政権を樹立したこの時期には、交通や流通面においても変化が見られるようになる。それまでは京都を中心とした交通網であったものが、「京都と鎌倉の二元的交通へ、すなわち東海道を機軸とした交通へと変わっていく」ことになった。<sup>6</sup> また、上洛する使者のために伊豆・駿河から近江国に至るまで、権門の荘園であるかなどに関わらず、馬を使わせたり食糧を差配したりするようにといった駅路の法も、頼朝によって定められている。<sup>7</sup> 曾我兄弟が頼朝の側近である祐経を敵として狙っていた時代状況として、こうした東海道の往來の増加や宿駅の整備という動きがあったことに留意したい。

また新城常三氏は東海道が鎌倉と京都を結ぶ街道となったことを受けて、鎌倉に近い相模の東海道が大幅に変化したことを指摘する。氏は「鎌倉に幕府の成立するに伴い、東海道は現在の海岸沿いとなり、大磯・茅ヶ崎・藤沢をへて鎌倉に通ずるようになった」と説明する。<sup>8</sup> 鎌倉時代には海岸沿いの東海道の利便性が注目を集めるようになっていた。

こうした時代背景に影響を受けてか、真名本は宿駅の一つ一つを細かく記す。母から結婚せよと説得され、さらに五郎によって遊女ならば罪科も及ばず情報も入手しやすいであろうと勧められたのを受けて、十郎は数々の宿を訪れる。そこに示されるのが、小田原、

佐河(酒匂)、古宇津(国府津)、渋美、小磯、大磯、平塚、三浦、鎌倉といった海岸沿いの宿である。宿を渡り歩いた十郎は、人々や情報行き交う大磯で虎御前と出会う。工藤祐経が鎌倉へ向かうため大磯を出立したという情報を曾我兄弟が得たのも、ここで和田義盛の酒宴においてであった。有用な情報を手して東海道上で祐経を狙う機会がありながらも、曾我兄弟はそれを生かし切れない。

このように頼朝が影響力を持った「道」という視点から捉え直すと、鎌倉幕府という体制側からすれば異分子だと見做されてしまう存在の曾我兄弟の違和感が際立つことになる。彼らにとつて、往來の激しいこの道は、異質でなじまぬ空間であり、常に目立たぬように身を隠しながら行動することを要請される緊張感に満ちた場であった。

頼朝が北関東の狩場を巡る場面においても同様のことが指摘できる。曾我兄弟が追う頼朝一行の様子は、「用心禁<sub>レ</sub>奉<sub>三</sub>守<sub>二</sub>護<sub>一</sub>君<sub>レ</sub>无<sub>レ</sub>少<sub>一</sub>の隙<sub>二</sub>」と記される。こうした表現が何度も繰り返されることで、権力者として君臨する頼朝に対して、非力で卑小な曾我兄弟の姿が浮き彫りになる。このような厳重な管理のもとにある狩場に關して会田実氏は、工藤祐経が伊東祐親の暗殺を企てた頃の情勢とは異なつて、「頼朝を頂点とする統率がそこにはあり、すでにアーキーな状況は皆無<sub>二</sub>」であったことを指摘する<sup>9)</sup>。

海岸沿いの東海道の宿名が羅列されていることは先述したが、これらの名は目新しさをもつて受け止められたのではなかるうか。虎御前が生まれた「平塚」は、『吾妻鏡』に北条政子の安産祈願を

行つた相模国の寺社に「範隆寺<sub>平塚</sub>」「黒部宮<sub>平塚</sub>」とあるのを初見とする<sup>10)</sup>。また「よろき」「こゆるぎ」などと称されることの多かつた大磯地域周辺は、「大磯」としてもその名が取り上げられるようになる。富士野で巻狩が行われるとの情報を得て三浦から西へと曾我兄弟が移動する際には、「和賀江の小坪」から始まって片瀬河や相模河、平塚宿などを過ぎて「金屋河の大橋」を越え、虎のいる「大磯宿」に十郎が入り、五郎はその先の「小磯・渋美・古宇津の宿・佐河濱」を過ぎて早河の伯母(土肥遠平の妻で祐親の娘)のもとへと行つた、というように地名が詳細に書き留められる。曾我兄弟の動きに従つて海岸沿いの地名を丁寧確認しつつ進んでいるかのよな印象を与える。

この場面で東海道の流れから少し逸れた場所に位置しているため、五郎が見渡すのみにとどまつたのが、曾我である。交通や流通の盛んな〈公〉的な道には直接関与しないといつた点で、曾我は疎外された地であつたとも言える。またそれゆえに曾我兄弟にとっては、守られた空間にもなり得たことであろう。

だからこそ曾我で虎と最後の時を過ごした十郎は、帰り道には中村通を行くようにと助言することになる。「大道」を利用することで人に見つかることを怖れたのである。往來の人々に行き合うことは見知つた人にとつても自分にとつても「恥」であると十郎は考えていた。ここで十郎が勧めた中村通とは目的地に向かう各種の道を呼んだもので、「大道」と呼ばれる「東海道を含め鎌倉を中心に放射状にのびる幹線道」は、「公共的機能のもつ意味を體現した道へ

の通称であつたろう」とされている。<sup>(11)</sup>「大道」の利用は「恥」を生じさせる元凶となるがゆえに、十郎は公共性の低い道を使用するようにと大磯に戻る虎に勧めたのである。

富士の裾野へ向かう際に湯坂峠から振り返り、古里(曾我)や新里(大磯)を眺めて物思いをする十郎に向かって、五郎は京都と鎌倉を往還する人々に見られるのも恥ずかしいと説く。また後に下人達によって、命が惜しくてお泣きになつていたのではないかなどと語られてしまうのも恥であるとして十郎を諫めた。他人に見咎められることを「恥」として危惧する二人の姿が強調されている。

このように人目につくことを怖れる曾我兄弟にとつて、鎌倉政権の強力な影響下にある街道を歩くことは、憚られるべき危険な行為であつた。

### 三 虎の扱った地

利用者の多い海岸沿いの東海道から曾我が外れた地点にあると先述したが、源頼朝が挙兵した当時の曾我祐信の立場もまた微妙なものであつた。当初は反頼朝側についていた祐信であつたが、後に頼朝に投降することになる。安田元久氏は、「曾我・糟谷・毛利はそれぞれ独立した新興の小武士団で、源家との伝統的関係は稀薄で、頼朝から誘引されることもなかつたものと思われる」と指摘する。<sup>(12)</sup>

頼朝挙兵時に主力となつたのは三浦や中村といった相模の有力武士団であり、両氏は頼朝による政権確立後も引き続き相模において影響力を持っていた。<sup>(13)</sup>

なかでも三浦氏については、湯山学氏によつて「古代末期から三浦半島と相模中部の枢要部に一族が繁衍しえたことは、三浦郡司であるとともに、相模介として、相模の国衙機能を現地にあつて行使しえたことによる」とされておられ、氏の研究から三浦一族の者が「平塚」氏を名のつていることも知られる。平塚は虎御前が生まれて幼少期を過ごした地であり、虎が養女として引き取られた先の大磯と共に三浦氏の影響下にあつたことは興味深い。<sup>(14)</sup>

三浦氏が相模国において権力を持っていた事例としては、義澄の子である義村が、祖父の義明以来相模国の雑事に関わり、頼朝の時に義澄が検断を行うようにと承つたのだとする『吾妻鏡』の記事が挙げられる。交通や流通面においての関与も、三浦義澄が差配して二所参詣のために相模河に浮橋をかけた<sup>(15)</sup>り、大磯に到着した藤原泰衡による朝廷への献上品を抑留すべきかと頼朝に指示を仰いだりしたという記事からも明らかである。さらに義村は稲毛重成が架けた相模川の橋が傷んでいることを言上して、実朝から修理して再興するようにと命じられている。<sup>(16)</sup> 義澄は曾我兄弟の伯父であり、義村はいとこにあたる。

このような背景は、なぜ反体制側と目される立場にある十郎が、交通の要衝であり、人々の往来が多い大磯の虎御前のもとへと通い得たのかという疑問に対して解決の一端を示してくれよう。曾我兄弟の父方や母方の広範な親族ネットワークのなかでも殊に三浦氏の庇護があつたからこそ、兄弟は東海道へと姿を現すことが出来たと考えられる。大磯の宿で情報を得た曾我兄弟が、鎌倉に向かう祐経

を追うも討ちそびれて三浦へとそのまま入ったという描写もそれを裏付ける。那須野での狩を終えた頼朝が鎌倉に戻った際にも、後を追っていた曾我兄弟は三浦の伯母（義澄の妻）の館へ帰ったとあるように、彼らにとって三浦は重要な拠点として描かれる。親身になって接してくれる三浦の伯母に曾我兄弟も信頼を寄せており、この地で得た富士野の狩の開催に関する情報が十郎と五郎に決意を固めさせることになる。

さて、この時期において存在感を増した交通路や宿駅に対する細やかな視点が真名本に反映されていることは確認した。こうした道や土地に対する真名本の意識の高さを考慮に入れると、虎御前の扱った場所も意図的に描き出されていると想定できよう。流動性を孕む大磯宿の遊女であった虎御前が、箱根山で出家して「禪修比丘尼」となり、巡礼の際には十郎の「婦妻」と名のるようになる<sup>20</sup>。自己卑下していた遊女という不安定な境遇から、十郎との出会いを通して妻となり、やがて信望を集める者へと、虎は変容しながら徐々に安定していく存在として造型される。虎の置かれた状況や役割に応じて、その居所も移行している。

こうして最終的に虎が落ちて着く地が曾我である。この地は、曾我の母の悲しみに対して深い同情を寄せた頼朝が、「自今以後於<sup>ては</sup>曾我の莊<sup>に</sup>年貢辨濟<sup>す</sup>、二人の者共<sup>か</sup>爲<sup>す</sup>孝養<sup>を取</sup>、<sup>る</sup>母<sup>に</sup>」と決定し、また曾我兄弟の死後三年目の法要の際には、「名<sup>に</sup>念佛<sup>田</sup>、土橋・中村の兩郷<sup>には</sup>公田有<sup>る</sup>百六十町處<sup>を</sup>有<sup>る</sup>御寄進<sup>す</sup>」という経緯のあった場である。頼朝が曾我の御霊祭祀に関与することで王権の安泰を

図ろうとしたという考察も従来なされる<sup>21</sup>ところであるが、虎の扱える曾我が頼朝権力の傘下に全面的に組み込まれたとはやはり言い切れないのではないか。高木信氏は女性達が行った巡礼の検討を通して、虎が巡礼において絶対的な敵対者とは出会わないことから、虎たちの親密圏と頼朝を中心とする象徴秩序を維持する者たちの想像の共同体はすれちがっており、虎は「男性中心主義的な象徴秩序には絡め取られてしまったりしない」ことを指摘する<sup>22</sup>。

虎御前に帰依したとして、三浦や鎌倉、曾我の一門、本間・渋谷・海老名・二宮・松田・河村・土谷（土屋）・土肥・岡崎・洪美・早河といった人々の名が挙げられる。曾我の地が（公）の道が象徴する政治的な世界からは少し離れた場に位置していたからこそ、むしろそのような宗教的な求心力を発揮し得たとは言えないだろうか。救済する者としての虎の姿は、東海道上の往来盛んな大磯ではなく、その流れからは外れた形で存する曾我でこそ説得力を持ち得たことであろう。物語の終盤には、曾我兄弟の母や曾我祐信、虎御前の母、曾我兄弟の従者である丹三郎や鬼王丸の往生に続いて虎御前の往生の場面が語られ、さらには十二人の尼公達も往生を遂げた<sup>23</sup>と記される。虎が曾我に籠った縁によつて、新たに「往生」を可能とする場であるという要素がこの地に加えられたのである。

#### 四 曾我兄弟の庭

十郎と五郎の心を曾我の地に強く引き留めるものとして特筆されるのが、庭という空間である。曾我兄弟の鎮魂供養が効果的になさ

れるためには、彼らが心を残し、かつ葬られた場で行われることが必要である。さらにそうした理由に加えて、虎御前が曾我を本拠としたのは彼らの庭を継承する者として物語において構想されていたからだと考えられる。

富士野へと敵討に向かう前、曾我で虎と過ごして山彦山の峠で別れた十郎は、曾我に帰り着いて涙を流す。悲しみに暮れる十郎に対して、五郎は住み馴れた栖を見るのもこれが最後だと言う。二人で庭を見廻って長年育ててきた「千草の華」(「千草」は「千種」、「華」は「花」とも表記される)を共に眺め、草木が芽を出しているのを見ては哀れむ。十郎による「我等年來日來手觸し馴染し名残ナレハ、何とか思はむに永き別とは、差賀に人ナハ可レ云レ哀なるとも、不らも見へ其の色」<sup>(一)</sup>、無情草木<sup>(二)</sup>其折節にナレハ申<sup>(三)</sup>心の留ル<sup>(四)</sup>耶ととの発言を受けて、五郎は「草木無<sup>(五)</sup>情誰か可<sup>(六)</sup>申<sup>(七)</sup>」として、釈迦如来の涅槃の時に諸木が憂いの色を示した話や、菅原道真の梅と桜の木の話を語る。道真が大宰府に流される時に庭の梅と桜に別れの歌を詠みかけたところ、梅は後を追ひ、桜は別の人が移ってきて一日のうちに枯れて倒れたという逸話である。そうして五郎はまた、草木も色にこそ見えぬが嘆いているであろうに、凡夫ゆえにそれを知ることができないと語る。庭の草木に寄せる曾我兄弟の思いが伝わってくる。

尾河三郎によつて曾我へと運ばれた十郎と五郎の首は、「子共<sup>(八)</sup>殖<sup>(九)</sup>置<sup>(一〇)</sup>て常<sup>(一一)</sup>愛<sup>(一二)</sup>せける」「千種華苑の山」において火葬に付されることとなつた。そして、兄弟の百箇日の法要を箱根で行うと聞いた虎が曾我の里を訪れた時に十郎の住まいに案内されて見たのも、庭の

「千草の華」であつた。

さらに、箱根で出家した虎御前が、一周忌の仏事のために五月十八日に曾我の里に入つて十郎の館に迎え入れられた際にも千種の華を見渡す場面が描かれる。虎は、その千種の華を見て十郎を思い出し、涙を流す。そして五月二十八日には、十郎を想つて「見ルカラ二千種ノ花ノツラキカナ別レサリセハナケカサラマシ」という歌を詠む。このように千種の華のある庭と十郎との密接な連繫のうちに虎御前が絡め取られていく過程が語られる。

虎の死のきっかけについては、「或<sup>(一)</sup>晩<sup>(二)</sup>傾<sup>(三)</sup>に立<sup>(四)</sup>出<sup>(五)</sup>て御堂の大門<sup>(六)</sup>へ思<sup>(七)</sup>連<sup>(八)</sup>て昔<sup>(九)</sup>の事<sup>(一〇)</sup>共<sup>(一一)</sup>流<sup>(一二)</sup>涙<sup>(一三)</sup>を折<sup>(一四)</sup>節<sup>(一五)</sup>を庭<sup>(一六)</sup>の櫻<sup>(一七)</sup>の本<sup>(一八)</sup>立<sup>(一九)</sup>ち斜<sup>(二〇)</sup>小<sup>(二一)</sup>枝<sup>(二二)</sup>下<sup>(二三)</sup>見<sup>(二四)</sup>成<sup>(二五)</sup>て十<sup>(二六)</sup>郎<sup>(二七)</sup>が寐<sup>(二八)</sup>と走<sup>(二九)</sup>り寄<sup>(三〇)</sup>、欲<sup>(三一)</sup>スレども取<sup>(三二)</sup>付<sup>(三三)</sup>かむと、只徒<sup>(三四)</sup>の木<sup>(三五)</sup>枝<sup>(三六)</sup>ナレハ倒<sup>(三七)</sup>にけ里<sup>(三八)</sup>のツツ<sup>(三九)</sup>とあり、この時から病づいて後に大往生を遂げた」と記される。

虎御前が桜の木に十郎が現じたと見做したとするこの場面については、先学によつて夙に研究されるところである。ここでは、この庭で虎が見た十郎の姿は十郎や虎御前の想いを汲んだ桜の木が見せた幻であつたという可能性を考察したい。これを草木(木草)感応譚として理解すれば、富士野へと出発する前に五郎が語つた草木のエピソードに対応することに気付く。十郎による庭と虎御前に対する執心や、虎御前が十郎のことを思い出しながら庭を眺めたという状況を考慮すれば、心ある桜の木が十郎の姿を虎御前に見せたという解釈が可能になる。

これに類するものとして『今物語』第二六話「小式部の夢」が挙

げられよう。大二条殿（藤原教通）の訪れが途絶えていたある夕暮れに、小式部が恋しく物思いに耽って外を眺めていると大二条殿が訪れる。小式部は明け方の夢に殿の直衣の袖に糸のついた針を刺したところで目が覚めた。朝、また物思いに耽りながら外を眺めると前にある桜の木に糸が下がっているので不思議に思っ見てみると夢の中で殿の直衣の袖に刺した針であった。

この話の末尾には、「あながちに物を思ふ折りに、木草なれども、かやうなる事の侍るにや。その夜、御渡りある事、まことにはなかりけり」と記される。『今物語』の解説には、「この話の場合は神仏ではなく『本草』の感応であり、誰もが三輪山伝承を思い出す語り口とあいまって古朴さを特徴とする」一方で、「王朝女流文学のキーワード『端』『ながめ』『夢』などが折り込まれており、さまざまな要素が微妙に配合されて相乗効果を挙げていよう」と説明される。虎御前もまた夕方に御堂の大門に出て、十郎とのことを思い出しながら涙を流していた折りであったことが思い合される。人を恋い慕う思いが強い時には、木や草であつてもそれに感応して心を示すこともあるのではないかと考えられていた。つまり、木に主性を認めるといふ考え方である。関連性があるとして想起されるのは、先ほどの道真に関する飛び梅伝承である。『十訓抄』（六ノ十七）や『古今著聞集』（六七一話）には、「東風吹かば」の歌を詠んで筑紫に移った道真のもとへ梅の木が飛来し、その梅に向かって歌を詠みかけたところ返事をしたという話が伝わる。

歌を詠みかけられた木がそれに応じるといった点においては、虎

御前が駿河国小林郷の森の社を訪れた場面にも共通性が見られる。虎は、十郎と五郎が御霊神となり富士浅間大菩薩の客人宮として祀られていることを知って七日七夜不断念仏をする。虎が社を出る際に歌を詠んだところ、大木の梢から十郎のような声で歌が詠みかけられたという。これもまた虎御前の強い想いに応えた樹木を通じた現象であるとも捉えられよう。ここで重要なのは、草木によって示された意を汲めるかどうか、あるいは感じ取る能力があるかということであり、それゆえ五郎は「草木共々不<sub>レ</sub>見<sub>ヘ</sub>色<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>すも<sub>レ</sub>歎<sub>キ</sub>、我等は凡夫<sub>ナリ</sub>は不<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>其<sub>キ</sub>」と発言していたのであつた。そのような背景があつたからこそ、樹木による働きかけを受け止めることができた虎御前の優れた特質が際立つのである。最終的に曾我の庭の草木に焦点を絞り込んでいくまなざしは、曾我兄弟が歩いた東海道や頼朝による狩場巡り、さらには虎御前の巡礼などの（線）の動きに着目したそれまでの視点とは対照的な、（点）の印象を残すことに成功する。

### 結びに

本稿では、曾我兄弟の母親像に表徴されるような「養育、再生」の空間であつた曾我に、出家して諸国を巡礼した虎御前が関与したことで「往生」の空間という要素が付加されたことを確認した。『曾我物語』が曾我兄弟の敵討の物語であるということは言うまでもないが、曾我の地が虎御前を迎えて救済の磁場となる過程を描いた物語であると見ることもできるのではないか。

また『曾我物語』は、流人であった頼朝が権力者へと上りつめる過程で夥しい数の犠牲者を出したことも記す。曾我の地に多くの人が参集したことからも、曾我兄弟の鎮魂供養のみならず、そうした経緯によって痛手を被った人々を癒す役割も担っていたのではないかと。確かに頼朝による寄進などの関与があつてこそ存在し得た場ではある。だが、公共性が強くて往來の激しい海岸沿いの道から少し距離を置いて存在する曾我は、それゆえに安息の空間として人々に捉えられたのではないかと推察される。

注1 真名本の引用は角川源義編『妙本寺本曾我物語』貴重古典籍叢刊3 (角川書店 一九六九年三月) に拠る。また旧字体を新字体で表すなど、私に適宜表記を改めたところもある。

2 市古貞次 大島建彦校注『曾我物語』(日本古典文学大系 岩波書店 一九九二年十二月 初版一九六六年一月)。以下、仮名本の引用はこれに拠る。

3 『真名本曾我物語2』解説(笹川祥生 信太周 高橋喜一他編 東洋文庫 平凡社 一九九六年五月 初版第一刷一九八三年六月)

4 曾我兄弟の母に関して、山添昌子氏は「一生に三度も結婚し、三人の夫と共に八人の生命を生み出し育て上げたというおおかで生き生きとした健康な生命力あふれる優しい妻の姿が具現されている」とし、ここから「失ったものへの懐旧・追慕に心身を委ねることなく、再婚を重ね現実的な家庭生活を妻としてよみがえりながら送り抜いていった、限りなくたくましい女性像が明らかになる」と指摘する(『真字本『曾我物語』における女性像』「女性と文化」I 白馬社 一九七九年十一月)。

また会田実氏は、自己の役割を果たそうとする「社会的性」と「母」性が幾重にも裏切られてくるところに彼女の悲劇の核があると指摘する(『真名本曾我物語』の母親像——その悲しみの原質『中世文学研究』

一九九二年八月)。

5 『曾我物語の史的研究』(吉川弘文館 二〇一四年十二月)  
6 児玉幸多編『日本交通史』(吉川弘文館 二〇〇一年五月 第一刷一九九二年十一月)

7 『舊國史大系吾妻鏡』文治元(一一八五)年十一月二十九日条

8 『鎌倉時代の交通』(吉川弘文館 一九九五年十一月 第二版第一刷一九六七年十二月)

9 『曾我物語』その表象と再生(笠間書院 二〇〇四年十一月)

10 建久三(一一九二)年八月九日条

11 神崎彰利、福島金治編『鎌倉・横浜と東海道』(街道の日本史21 吉川弘文館 二〇〇二年十二月)

12 「中世初期における相模国武士団」(峰岸純夫編『三浦氏の研究 第二期 関東武士研究叢書6』名著出版 二〇〇八年二月)

13 国力が凋弊して農作業が捗々しくないことを憐れんだ頼朝が、三浦義澄と中村宗平らに相模国中の主な百姓に米を与えるよう命じた記事が『吾妻鏡』文治二(一一八六)年六月一日条に載る。

14 「相模三浦氏についての考察」(『三浦氏の研究』所収 前掲書12)によれば、三浦氏に属する津久井義行の孫義國の弟である為高は「平塚権三郎」といつて大住郡平塚の地に拠つたとし、為高の子の光高と考えられる「平塚兵衛尉」は歴仁元年の將軍頼朝の上洛に際して三浦義村の家子三十六人の一人となつていとす。また光高の子の光広は「平塚左衛門尉」といつて宝治合戦の際に三浦泰村に属して討死したことが指摘されている。

15 拙稿「トラ・寅・虎」の多様性——『曾我物語』の虎御前に関する一考察——(『成蹊國文』第四十八号 二〇一四年三月)

16 承元三(一一八〇)年正月十五日条

17 文治四(一一八八)年正月二十日条

18 文治四(一一八八)年六月十一日条

19 建暦二(一一二二)年二月二十八日条

20 この点に関しては会田実氏による、「十郎の生前は世間的にはつまると

ころ遊女と馴染客をこえるものではなかったのだから出家を遂げ「婦妻」と名のことによって、十郎が敵討ちを告白した際の個と個の男女関係が彼女の中で実現したのであった。このとき虎は負い目を感じる立場から個の主体性をもった女へ自己を転化させたといえるだろう」と指摘がある(会田氏前掲書<sup>9)</sup>。

21 曾我における兄弟鎮魂は頼朝の意思によって怨親平等の世界のためになされるもので、それにより王権安泰を期待するといった構想がある(「曾我物語」の成立)三弥井書店 二〇〇二年十二月。また会田実氏は、頼朝は曾我氏を通じて富士浅間の人宮となった曾我御霊祭祀・鎮魂を行わせて富士浅間を幕府の守護神化しようとしたと考察する(『曾我物語』とは何か、なぜ「曾我」の物語なのか―名を後代に留めるといふことの意味をきっかけに―)『四国大  
学紀要人文・社会科学編』第三十二号、二〇〇九年十二月。

22 高木信氏は、虎の巡礼は「象徴秩序のなかに収まりきらない自身と、やはり象徴秩序から疎外された曾我兄弟の記憶を外典的に救済する行為といえるのではなからうか」とし、巡礼という(歩行)は頼朝の権力の浸透した空間に別種の空間を介入させて権力空間に亀裂と位相差を持ち込むということを指摘する(「虎」という女―真名本『曾我物語』における巡礼する女性たち、あるいは象徴秩序からの逃走―)『相模国文』第三十八号、二〇一一年三月。

23 なお王権と関わるものとして「狩庭」が先学の研究において重視されており、これに対するものとして曾我兄弟の私的な「庭」があるのではないかと考えられるが、この点に関しては今後の研究の課題としたい。「庭」の特質については、網野善彦『中世の世界とは何だろうか』(朝日選書555 朝日新聞社 一九九六年六月)に興味深い指摘がある。

24 福田晃「神道集」群馬八ヶ権現事」の形成(『大谷女子大学紀要』第4号 一九七〇年)、会田実「真字本『曾我物語』に見る男と女の構図―他律からの反転。『虎最期』の検討として」(『日本文学』三七巻三号一九八八年三月)、カナバット・ルーネビロム「真名本『曾我物語』における大磯の虎―苦悩の克服と愛執の様相―」(『詞林』第四十九

号 大阪大学古代中世文学研究会 二〇一一年四月)など。

25 三木紀人『今物語』(講談社学術文庫 一九九八年十月)。引用もこれに拠る。なお本話については柴佳世乃「小式部内侍の說話―『今物語』第三六話をよむ―」(『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第二十号 一九九六年三月)参照。

26 久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江校注『中世の文学 今物語・隆房集・東斎随筆』(三弥井書店 一九七九年五月)の補注には、「桜には怨霊・悪霊が降り来るという信仰が、中世にはあったのである」として、この虎御前の桜と往生にまつわる部分が引用され、「思う人の面影が桜の木にダブってあらわれるといふ話の型には、それなりの基盤があったものであろう」とする。

浅見和彦氏によれば、この『今物語』第二六話の例からも「木霊婚姻譚」が平安時代には既に存在しており、「木精が男と化し、女と交情する」という点においては『あこや姫伝説』のきわめて古い類話として、非常に価値が高い」とされる。そして「『こだま』はあくまで『木魂』『木霊』であり、古代の人々は間違いなく本物の『木魂』の声を聞き、『木魂』と語り合っていた」ということも指摘されている(『アコヤノ松』のことも)『成蹊國文』第三七号 二〇〇四年三月)。

27 父親である河津三郎の敵を討った十郎と五郎の物語がなぜ『曾我物語』という名になるのかという点に関しては会田実氏による考察がある(会田氏前掲論文<sup>21)</sup>。

(しんむら・えりこ 本学非常勤講師)